美術の窓(95)

鉄斎画二題
—拡大図の魅力と密着する迫力—

大和文華館館長　水田　徹

ご案内のように本館ではほぼ隔年に館蔵品による鉄斎展を開催しますが、その理由は大きく二つあります。

一つは鉄斎展が毎回大変ご好評を頂くことです。それも単にご入館者の数だけではありません。性別の偏りもなく年齢層も実に多様なお客様が来館され、しかも皆様比較的長時間展示場に留まられ、かつどなたも一様に満足げに館を後にされるとお見受けするのです。鉄斎画は老若男女を問わず、万人を引きつける魅力を持っているということでしょう。

鉄斎展を繁く催す第二の理由は、これもご承知の方が多いと思いますが、当館所蔵の鉄斎作品は、鉄斎が40余年間付き合った伊予（松山市）三津浜の近藤家由来の品々であり、その多くは鉄斎の書状が添えられ、さらには作品郵送時の梱包紙に至るまで近藤家が丁寧に保管されていたものすべてが一括して当館に譲られているのであります。書状の多くは盆暮れの贈物に対する返礼としてこの絵を添えるという内容のものですが、鉄斎の時々の心情、作品に対する思いが随所に見受けられ、鉄斎研究の貴重な資料となります。そうした鉄斎自身の手になる文字資料を伴った作品であればこそ、それを鉄斎愛好家の皆様に定時的にご覧頂くこと、それが本館の果たすべき使命のひとつと心得てのことであります。

さて鉄斎画の魅力の一つに拡大図の迫力、対象に密着する気構えのすさまじさ、ともいうべきものがあります。

本館所在の「梅華満開夜図」（図１）と「寒月照梅華図」（図２）は明治44年の歌会始めの勅題にちなんで描かれた双幅で、前者が紙本墨画淡彩の全図、後者が墨一色で描いた紙本墨画の拡大図です。

全図の方は画面中央の東屋から夫婦とおぼしき男女が川辺に出て、満開の梅林越しに山の頂に出た月を見上げる図で、男は首が折れんばかりに仰向き、女性もまた顔を上げ左手で月を指さす。東屋の中の小さな代赭の一点は赤子であろうか。とすれば月の余りの明るさに誘われ二人して思わず庭に出た場面、ということになろうか。寒月の明るさ、梅の見事さ、そして人情の機微を、淡彩ながら輝くような色合いで見事に描き出した心温まる名品といえます。

そして注目すべきは、画中の女性の指さす先を辿り、彼女の目に映った光景を想像すると、正しくそれが対となる紙本墨画の方の図に当たると考えられる点です。彼女の位置から見れば、梅も月も丁度この大きさに、この距離間隔に見える筈なのです。

かくてこの双幅は全体図と部分図をただ思い付きで組み合わせたものではなく、鉄斎が画中の人物に密着しその心を刻み込むべく取り組んだ、迫真の対幅というべきでありましょう。

対象に密着する迫真の作画という点では、本館所在のもう一点、鉄斎85歳作の拡大図「富士山頂上図」（図３）も見逃せません。

晩年付き合いが深かった京都虎屋の支配人黒川正弘氏が富士登山記念に持ち帰った頂上印を捺した画仙紙に、同じく土産にもらった富士山頂の霊水「金明水を用いて描いた」と画賛された富士山頂上図で、ほぼ同趣向同図柄の一点が車折神社車軒文庫にも所蔵されています。『鉄斎「富士山図」の謎』（2004年、学生社）を著された笠嶋忠幸氏によれば、本館所蔵品の御朱印「北東頂上之印」は吉田口頂上の久須志神社で捺してもらえるもので、画中の印の位置は廻りの岩石の形状から見て正しく久須志神社が建つ位置に相当するのだそうです。なお車折神社車軒文庫本には「表口頂上之印」が捺されていて、こちらは頂上浅間大社奥宮でもらえる印で、その位置はやはり奥宮の真上に当たるといいます。

鉄斎が富士山に登ったのは明治８年、40歳の時ただ一度ですが、この御朱印と霊水は45年前の登頂の感激をまざまざと蘇らせたのでしょう。そして私が感嘆するのは、朱印の画中での位置もさることながら、特に大和文華館本では印が岩石そのものの上に捺されている、正確には印を取り込んで岩石を描いている点です。画仙紙に赤く輝く「北東頂上之印」は鉄斎にとって神社の位置を示す単なるしるしではなく、久須志神社そのものであったと思われるのです。

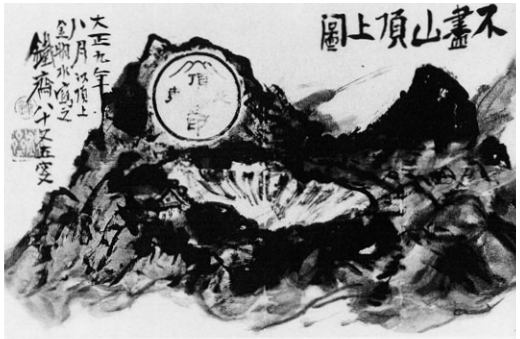
話は飛びますが鉄斎の画業を語った座談会で、画家・中川一政はこう発言しています。「（鉄斎は）ずいぶん若い時から篆刻に関心を持っていた。篆刻というものの根源は金石ですからね、彫るんでしょう。描くものではない。……その強さがやっぱり根本になっている。あの墨色でも色彩でもそこから出てきているんじゃないか」（『鉄斎大成』第３巻所収、1977年、講談社）。

御朱印は篆刻でこそありませんが、その印を久須志神社そのものとして画中に取り込むところに、鉄斎の密着と迫真の作画態度の一端が現われていると思われてなりません。

図１　富岡鉄斎、梅花満開夜図　明治44年・76歳

図２　富岡鉄斎、寒月照梅華図　明治44年・76歳

図３　富岡鉄斎、富士山頂図　大正9年・85歳



季刊 美のたより №153
平成18年１月５日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.